

自由連合

Libera Federacio
1971年
9月20日
No. 32

姫路市山崎354
自由連合社

定価 30円
振替口座
大阪 1264
自由連合社

④ 今号から赤字。つまり
自連の会計が赤字に
なつた。赤は
なんとしても良くない。
果が一番。洋金タノ4。

居直れ！井戸端公談から

ルポ 私的・リヴ合宿記

一月るい

8・21、24日の4日間、ウーマン・リヴ合宿。所は長野県飯山市の黒岩山スキー場、「鈴荘」。なにか田舎道。リンゴと桃の炎いえんじ色が、いやになまめかしい。

民宿が集つてゐる山への入口に着板。「リヴへの招待」。「Eトシ」ンカラヌー上映。「歩いていくと、「アイツら、リヴのへ女Vやな」とばかり、キャンプにきた入男Vたち。

「うらみ、うらみをこめて」さて、オ一日。リヴ合宿の「下準備をしたのは事務局」。「60%は事務局が、40%は参加者でつくり出すこと」という御託宣。

午後4時すぎからの全体集會は、自己紹介から始まる。ほぼ共通してゐるのは、「抑圧を受けてきた」という、うらみ、うらみの発言。

④ 「ちいさい時から、女はこうしなければいけません。女は勉強できなくてもいい、と言われてきた」

④ 「男であればスーツとやれたのに、女であるがゆえに、できない」

④ 「家事について、しよせん男は女を理解していても、手伝いに終る」

④ 「女が女であることが、どん

なに頭專的なことか、男の人にわがるでしようか？」

④ 「女が男から解放されるV要求をうえて、男と共に性抑圧から解放されるV要求をもつものでないと、斗いへの男の獲得は不可能だと思ふ」

④ 「現代の社会では、女は唱婦である。自らの性を切り捨てることにしか生きる道がない。妻と唱婦は本質的に、女の卑しめられた性をもちながら、妻は合法的で社会に認められてゐるが故に、唱婦を抑圧する存在としてゐる。そこで両者を拒否しようとする女は、女であることを切り捨てねばならない」

④ 「だから、女の本来の機能一生殖を拒否せねばならぬ」

④ 「テナなし兒をどんどん生んで子もち女連合をつくらう」

④ 「コンドームはどちらが買うか？男は本質的にそれを必要とはしない。必要とするのは女。だから、女が買うべきなのか？」

④ 「問題を男対女Vとしてたてろことを、私は拒否する。女は女を語ることによつて、決して、先罪をれない。女は女であることによつて最も鋭く、女を裏切りうると思ふ」

④ 「階級的視点の名で、党の名で革命の名で、女はぎりぎりされてきた。言いかえれば、女を切り捨てたままで、それらを語る事ができたのです。女として斗おうとする私

は、そこから出発せねばならないと思ふ」

④ 「男革命司令部を告発する」

④ 「もう絶対、中絶はしないVあんな状況に自分をおきたくない。私の相手の男への憎しみは、女に対する男総体への憎しみとしてゐる」

④ 「出産するとVおめでどうV堕ろすと冷たい顔をみる。なんぞ？」

④ 「私は、女を切り捨ててきた自分が、男の言葉で革命を語ってきた自分が、そのことによって私たちの性を卑しめてきたことが、そのことが屈辱的だと気付いたから、だから女として斗う宣言を発したんです」

総勢三十七名。十五才と五十才までの二十代がほとんどを占めた。女たちの自己を語ることは、えんえんとつづく。But、問題提起となるべき最後のところでは、ほとんど、うやむやになってしまつてゐる。

抑圧とは何か？

オ二日朝、前庭から上をみるとオムツがずりり。すさまじく鮮烈な女の旗（ガキつれば十人程。いずれも一才未満で、無籍が半分くらい）

「私には、女としての抑圧は現実を感じられない。女だから損とか、女だからダメということについて、具体的に今、それを痛みとして実感できない。世間がどうの、親がどうの……と言っても、女をどび出したらしいやないの。抑圧といつてど

どういふことを言っているのか、具體的にききたい」

会場はどっと笑った。へーあ、きれた、という意味も含まれて来いである。

「あんだ、よっぽど幸せな人やねー。カンキョウ、よすぎたんやねー。」

「あんだ、ほんまに抑圧、感じないの?」しみじみ顔をみつけてきくのこいる。

「抑圧されている、というところが具体的に把握できたら、当然どないするか出されるはずとちがう。いままでリヴの集会に参加していても、いつも、告白的なものしか聞けなかった。今日も又、そればかりという感じがして、自分の経験したところからしかしゃべれへんけど、私にも抑圧がないとは思われへん。ただ、それがどんなものか、はきりわからへん。もちもやしてるんや。私にとって男一般はなく、個別の二人一人の男しかない。その男からの抑圧はほとんど感じないで、男一般からつけるそれが、一体何か、わからへん。笑うてんと、答えてや。」

「抑圧」ということはより細かに考へてよ。

① 男という人性Vからの抑圧。
② 男たち本位につくられた社会的、歴史的入制度Vからの抑圧。
③ 同族としての入女Vからの抑圧。
④ あらいは入女Vへの抑圧。
⑤ それらの関係の下での入自分自身Vからの抑圧。

というふうになると思う。それにしてもや、ぱり、抑圧の焦点としてあるのは、女としての自分自身やと思う」

「女が男に対して、人間として

の復権を要求するのは、もちろん女が男になることはちがう。だから女と男のちがいの特質を明確にし、その上で、女と男の1対1がどんなものかを追求するのが、私たちの在り方と思う」

「そんなら、まず女と男のちがいは一体、何?それは入同一労働同一賃金Vという立て前で、同じ仕事をせよ、と解決する問題とは思わない」

「女は一人前の仕事をさせてもらえない、というけど、今の社会で、それほど生きがいに値する職場や仕事がある。そのような仕事を男に任せる必要は、ひとつもない。お茶くみの問題にしても、むしろ、それをやって、お茶くみ料、余分によいせ。」と言つのが当然だと思う」

「だから、今強要されている入女らしさVに対して、入ちくない女Vを対置させるのでなくて、入自己変革する女Vとして、私たちは男に對したい。それでこそ入聞女V、入新しい女Vへの出発点。」

「入自己変革する女V」といって、カッといけど、実は、自分で言いながら、私にはほんとのところ、どうしたら自己変革になるか、わかっていない。自分の中に、イヤフシイ女を見つけた時、たとえ無茶苦茶でも、まず自分のそれを、すていくことしかない、と思ってる。そして私は、テトラメ娘と云われながら、それをやってきた」

「そつや、ネ。自分で自分のカラをやぶろ、テトラメと云われても、そんな女が、もっと増えんとあかんネ。この合宿も、話しにきいただけ、聞きにきただけでなくて、アナーキーな意見を出して、実行できる女を

つくりだしたい」

リヴ合宿が明らかにしたもの

このリヴ合宿にも当然のことながら、餌物にたかるハエのように、マスコミ関係がワンサ、とやってきた。立入禁止の男の記者連は、宿舍をとりまき、デバカメよろしく外からのぞきこんだ。

女たちが山へのぼると、さっそうむらがり、パチパチと写真とり。

そして週刊紙などには、興味本位の記事――すでに周知のとおり。

それにしても、記事を書いたのは女記者でした。(これが問題だが)はじめ事務局は、マスコミを入れるか入れないかで、みんなに相談した。そして、マスコミにゆづいてる女を支援する意味を含めて(取材費一万円をとって)女だけは仲間入り認めるところにした。

自己紹介に加った十人ほどの彼女たちは、「しよせん、女である私は男の記者の下劣的存在でしかない。このリヴ合宿に男が入れないからということで、あるいは女だから、ということで派遣するマスコミーのような本質が何であるかは、取材にきいた私にもよくわかってる。記事が上役によってゆがめられ、つくりかえられるオンレがあるにもかかわらず、なお、自分が女であることによって、その真実を伝えたいと考えている」

「私は取材にきたのだけれど、個人として、女として、去年の十・二一以来、リヴの運動に鮮然なるものを感じている。それは一つは、性、面からの男への造反。二つには、女自身への造反が打出されているから。ただ気になるのは、さっきの人が言ったように、何から解放されたいのか。(五頁中段へつづく)

立場の論理を

論議

喰いちぎれ

批判

すべての運動をその前段階闘争として組み、七二年を目前にひかえた新左翼各セクト・ノンセクトの現状はどうなっているのか。

激動の時代にあつて、混乱する体制内部と明確に二線を画する程の自立した運動はないとみなればならないだろう。労働者、農民の論理を、内在的・目的意識的に批判し展開しようとする運動の欠如や、〇〇反対・××粉砕といった行政レベルでの政治闘争への集中、その中でリンチによる党派性の露骨化によって運動と労働とあそびを混同する思想の美しさ、運動が破壊された面であらうか。それとも存在を費く生活された思想への反戦・革命・自由への追及するひたむきな情熱は戦後の人間にとって無縁であつたのか。

運動の主体であると同時に、変革の対象であるところの自己とはなれて、強圧の強化や情勢の変化を語ってはならない。とすればどのような方法と態度をれば、二ヒルな屈折のなかに頹廢する主体の現状を克服することが出来るのか。自然と人間生活を荒廃にさらしながらGNP神話のドレイとしての日常生活をひた走る民衆への批判的認識の欠如を問題にしながらもよいのだろうか。又目に見えない心理的強制力によってしほりつけ、八紘一宇などという偉体の知れぬ叫喚的スローガンによって圧倒的な民衆を組織し、侵略と抑圧を繰り返してきた日本社会の深部の

反戦か、先細りする非暴力論へ落ちこみ主体をすくいあげなければ、戦前の歴史を再びくりかえさざるをえなくなるだろう。

生活の組織化

民衆はGNP神話によって生きてきた。私たちも長い間スロータリヤ神話へスロータリヤートの先験的革命性の中を生きてきた。しかし今日、それらは幻想と解体のなかにくちはたつてしまっている。利潤の強制的蓄積が消費の拡大増大という幻想によって獲得しつづけることが不可能となつてしまふ、そのことが直接的に階級的闘争に結びつくか、それとも、国民的利害というところのひきつけられて、いっそう解体の加速を増すことになるのか。

反戦を闘うものにとって瞬時もあるがせにできないところにあるのか、ている。しかし私たちが敗北した戦後革命から学んだことを忘れずして、情勢の転換に幻惑されて無媒介的に大衆の政治意識をのみ組織する誤ちをとりかえしてはならないだろう。

大衆の生活の組織こそ変革の課題そのものだ。スローガンに唱和することは出来るかも知れない。しかし生活を変えることはむずかしい。衆の生活にふれてゐる。ただふれてゐるだけではなく、強固な人間関係をどうしてしっかりと結びつき、内側から支配に加担させているのだ。私はこの人間関係をどうして、とい

うことが、日本社会の分析、従つて方法の問題を考へるうえでの基礎になると思ふ。

資本の論理と労働者の欲望

家、職場、町内、同窓会、など小さな社会集団に対する徹底的な批判的分析を、これが私の主題である。この小集団を貫徹する「掟」は「つまあい」であり「直接上長者に対する忠誠」がその「倫理」である。おそろくこのことは就座して一年も経たないうちに肌にくいくいはずである。この掟と倫理によって成立している小集団を「ファミリ」のように積みあげてゆけば、そのまま国家になるからこそ軍国主義・天皇制・オロギヤが消えることない土壌としてふみがえってくるのだ。

もう少し具体的に書かねばならぬ。与どこの企業もストレス解消と称して、職場ぐるみのボーリングが盛んである。中高年者などは陰で「フツフツ不平を言いつつながら、表面はいつも柔順に、二・三時間「つまあい」をするのだが、あそびも「こで」は業務の一つであり、「つまあい」も月給の「つまあい」といつしきりになつてゐる。たとえその提案者が平工員であつても、会社の意を察んで発言していることは皆知つてゐる。

私事であつて私事でなく、公私のきり目のないまま強制力をもつからこそいやあつなしに統制されてしまふのだ。私制や会社のうしろだてのない個人が全くの私事として提案しても、それは必ずといっていいほど周知がされる。たとえ同調者がいてもごく少数にとどまつて全体の行事となることはない。

民主や集会はいうに及ばず、多少なりとも自由に（次頁につづく）

自分の時間を使おうとすれば、たちまち「つきあい」が悪いということになって「村八分」の状況に追い込められる。

さらに重要なことは「控制」が企業内部から垂直にのびて労働者の時間、空間を排他的に占有する。それは自由を求める労働者の、企業をこえた種の連帯を昇のうらにみとることである。

私が切っている会社の管理者用社内報は次のように書いている。

「現代の人間はいくつもの社会集団に属している。しかしもっとも重要であり社会的に問題視されるのが企業に属していることである。」

午後四時二十分以後、市民生活に戻っても、彼らはやはり、O×KKの社員なのだ。そして長髪を禁止し、ミニスカートの自肅を勧告している。家父長的权威を失った家庭に代って、しつけを引きつけ道徳的、文化的価値についての専断者としてのしあがって来た企業は、まさに分割された国家機能、宗教裁判所の役割をもちながら日常世界を律しているのである。

私の属する会社と同じ機械を作っているH機械の労働者につきまえば、現場工員まで、産業スパイと疑われるのだ。又銀行や、生命保険会社では他社の従業員と婚姻関係、親子関係が判明すれば、勿ち左遷されるか、情報の入らない座敷牢に閉じこめられてしまう。

このような経済の外的強制力に対しては労働組合は全く無力である。他労働との共同関係は表面的且つ一時的にすぎない。何故なら激烈な過当競争という資本の論理は、解体された労働者自身の望

と違っているからだ。「被抑圧者階級の中で、自己の階級的利害を表現する自主的イデオロギの成立を妨害すること」ヘルカー・チャシーニン論点しを直接の人間関係をどうして全面的に展開していることに注目したいと思う。

そして今や労働一体となった感のあるこの構造をぶちやぶらない限り、沖縄もベトナムも労働者の内部の問題になることはない。

運命共同体

を引き裂け

私一市民社会・公一国家という明確な分離が資本制社会の特質であるといわれているが、われわれの社会においては、課税の引越しの手合いまでいわば公事となって人々を拘束する。この心理的拘束性こそ、奴才意識の影である。これが直接の上司の人格や良心に代って「ポスト」が決定的意味をもち、彼をして契約関係からくる権能以上の絶対性を与え、集団成員の精神まで侵犯し且つ生存と尊厳をしいまにする不法の法が横行する所以である。

人々が生存の権利と自由のために何程のこともし得ないのは、「にらまれたら終りだ」という身についてた恐怖から解放されないからである。契約社会における権利義務は、あくまでたて前であって、運命共同体のしきたりにそと人々の日常を支配している。

天皇の意志なるものが、叫喚的スローガンによって粉飾されたにしても、たちまちのうちに民の意志となる秘密がそこにあるとすれば、抑圧の網の目をくぐりやぶる闘いもまたここに基礎をおかねばならないだろう。

かかる小集団の成員が、それぞれ

「立場の論理」によって、あるべき人間社会のあり方を陰險遮断していることに対して、われわれは何をなし得たか。いやその前にここに焦点をあてた闘いが直剣にくまれたかを向ねねばならない。全共同運動はその肉体をかけた数年間闘いつづけたけれども、社会の表面はいまだじろくことなく、かえって中教審路線が堂々と押し出されている。

運動としての「共同体論」が盛んであるが、市民社会を喰いやぶることのできなかつた運動体が、既存社会からしめ出されるという「負」の側面を冷静にみすえないかぎり、自閉症におかされるか、あるいは、自慰に終ってしまつたろう。

いずれにしてもこの醜態な運命共同体をひきこくことによってしか、自立した市民の連帯による反戦変革の闘いを構築することはできないのだ。私は自己の自由の実現と醜態な運命共同体をくいちぎることは表裏をなすものだと考える。

地域の活動家は、直接世界を獲得しなければならぬ。それは未来社会へ理想社会への予知にとどまらず、未来社会の原型を活動家集団の中に内包することである。

そこではじめて既存社会へ地域社会に対して持続的な緊張関係を持つことができる。

自立の意志と解体の感覚との二方向に大きく裂け、しかもその深い分裂のまま、それを超える視座をもたずに彷徨している人々、バリケードの経験を経験特としている人々の言葉に惑わされず、彼らとのいっしょ道を切り拓かねばならない。

自連に論争を。掲載論文、ルポに批判、感想をお寄せ下さい。

8月 備北岩国

思ひは録

服がくるくろ
をさばるやうに
じゃまにくる。

① 祈りを怒りに

広島

その時突然、ハ
レンチ学園の連

8月5日夜一時、岡山の備北兵
団体をマイクロバスで出た7名が
岩国着。すぐに「VIVA AN
ARKISM」自由連合「す
べての権力を人民に」④など
を書いた旗を3本作製。その同食
当がにぎりめしを作ったので夜
いや朝の3時にようやくタメシに
ありつく。台風之余波であいかわ
らす雨が強い。明日の平和公園で
のデモに期する所を抱いてつかの
間の床につく。

中が爆竹を鳴らした。5、6名がつ
かまって目の前をつれて行かれる。
「みんな嘘だ」「みんな嘘だ」「
と引、はられながら彼らは叫んだ。
式が終る。10名のデモと3本の旗
が唯一公園内を駆けぬぐる。右翼や
祈り主義者が旗をおろせとせきりに
いってくる。「祈ったって平和はこ
ないヨ」「祈ったって死者は喜ばな
いヨ、ほばれないヨ」とオしほは言
い返す。

8月6日朝6時起床。マイクロ
バスで、まづ佐藤首相の右ってい
るグラントホテルを見学⑤。⑥が
表も裏もすずなり、⑥の人砲戦術
なんてどうもいただけない。

平和公園の真中で

8時15分前、平和公園の中へ入
る。ハレンチ学園（ロック）を愛す
る東京方面のフリークスグループ。

雨なおしきり。全園下着までス
ヌレ。公園を一周まわってバスを目
指す。外人の混ったわれわれのデモ
「VIVA ANARKISM」の
旗がめづらしいのか、途中三回ほか
り映画のフィルムを回す者あり。
こんなデモはなんだが自己満足の
よう。もっとカンパニア活動やその
他現地のひととの協力が必要だと思わ
れた。でも棄てかけた。こんどはも
っと面白いことをやろう。

(ドクトル・ジバゴ)

② 聞け。おれらの声

広島市の平和公園のデモから4時半
頃岩国に帰って来た。岩国へ平連の
アジトを訪ね、ロックフェスティバ
ルの広告を、SUMMITRY（米
軍内反戦機関紙）に入れるのを手伝
う。それが済むと街に出て米兵に配
りはじめ。配っている近くに公園
があった、赤い公がじろじろ我々の
様子を覗いている。

中年の将校らしいのが「くれっ、
と合図したので寝すと、少し読んで
だけスツスツ怒り出した。

8時15分、運命の時（なんとも
んじやなくて米帝と日帝のとはっ
ちりを受けた、当然の憎むべき結
果の瞬間）、一分間黙祈。佐藤の
声が聞えはじめる。雨がどしゃぶ
りになってきた。我々の名と旗を
本、デモ隊は公然としている。私

Let me take your flagとかな
んどかわめき出した。そんな奴がい
るかと思つと、何も言わないのに新
聞を引きかえにカンパをくれる奴も
いた。

乗っ取られた夜

11PM頃になって、これだけでは
おもしろくないから、基地に奇襲を
もをかけようといつことになった。
我々とハレンチ学園、ベ平連の計6
名は、途中バスシャックをして、各
人各様の鳴り物を手に岩国駅に向つ。
岩国駅から月光に照らされた基地へ
の軍用道路をヒタヒタと行軍する。
30分ほどで基地前ゲートに到着する。
いよいよいっせいに自分達が持ち
込んだ鳴り物の音をだてる。空かん
に石をつめたのを振り回す奴、ス
リキかんを棒でたたいてトキの音を
発し、ゲートへ突進する者。基地正
面でアンプをいっせいにいじてエレキ
を演奏する者……。乗ってきた米兵
を睨んで深夜突然反戦集会がおっ、始
まったのだ。
あ、けにとられどぼつせんと見て
いるだけだったMPが、おっかない
顔をした日本の官憲を呼んできて、
集会に合流のしてきた。まづ、備北
から一掃だった我々の仲間の米人と
ベ平連の外人の三名が不当にもMP

(前)に連れ去られようとしたが、我々の激しいヤジと抵抗に会って三人は同もなく和がされた。

図太い居直りに

一応の成果をあげて、我々が口々に Fuck for the Peace を米兵と唱和しながら大声で叫んで帰路にしようとする中、官憲のおじさん達が急に威圧的になって我々を取り囲み、「責任者をだせ、出さずば帰さん」と脅迫してきた。晩酌をもち、いい気持ちになって寝ている所を起されたので、余程腹に来たのでいう、ほんのり赤く辛った顔で執拗にがらみついてきた。だいたいのアナキストに代表者も責任者もいるわけはない。えええん一時間も、同じ場所を同じセリフを繰り返していた。

そのうち、「どうせお前もなにい、また箱のメシをぶちまけるが」と図々しくも腹を決めた。けた我々に根負けしたのか、とうとう「帰ってもいいから、等間隔で三々五々に帰ってばえ」などと言いなうた。

もっとかえんぞと腹がったので、眠がったこともあって、等間隔で、三々五々にシム・レ・コールをしながら歩き始めた。親切にも官憲は途中までパトカーで誘導してくれたのだった。

(保富吉夫)

くさくさ下段のついでく

私的い合宿記

解放されて何をしたいのか。そしていっけい運動体になりたいのか。今のところ、単に信憑性がないという感じがする「なぐ、いも」も。私はそのように思った彼女たちのいっけい信憑性がある。あの場においての発言を、決断した。

かぎりに調査を合わせた嘘であったとは思われない。

それを信じた上で、あの週刊誌にあらわれたまったく興味本位にのみつくられた取材記事を読んだ。そして彼女たちが現実には、どんな役割を果しているのかというところ、女同士としてどういふものもないやりきれなさを感ずるところ。

あの時、たぶん、M社の女記者が「私は取材にきただけ」といってみんなから手ひどく野次られた。彼女は最後まで沈黙をとうして、野次に答へなかった。が、今考えてみると、結果として裏切りの立場に立つ以外にない自分を、彼女ははっきり自覚していたからかもしれない。

井戸端会議とは

結局いっけい合宿は、今までの集会和同じように、人間的に何をするかへどのように運動体としての機能をもちかへてとうとう出せなかった。そのことにおいて「いっせん井戸端会議を出るものではない」というヒヤカシを交したマスコミの批判はあつた。

井戸端会議、だがそれは男どもにとつて、あざけりの意味をもつ言葉であつても、女にとつてはちがうことを彼らは知った上で使ったのだらうか。井戸端会議結構、それは男たちの介入をゆるさぬ女たちがへ創る世界へのものだ。

しかも男たちの眼をがすめていこうとことと行われるのではなく、このように公然とはばかることなく女たちが大声をあびたことがつてあつたか、男どもがどのように論議しようとも、井戸端会議から以外に女の出席はないのだということも、私はこのいっけい合宿にきて、始めて痛感した。男どもがあらう女たちのハイヤラ

シワへの徹底的な告白をうきつけていくこと、そこからの居直りが、いま私の課題である。

最後に、いっけい合宿があの女記者たちの小さなころねをもぶつつぶし、女自身をも裏切らせるマスコミの横道にふれることによつてこれほどあつたかに、しかも具体的に男社会を摘出したこと、の皮肉さは、銘記しておくべきであろう。

編集室

④ マスコミを目標す、というミニコミが若干回につまびた。たゞ量的拡大だけを目標にするのではなく、ミニコミの本質的意味がその視野に入らない証拠でもある。発行部数が少いから、かり版ばかりミニコミだ、ということでは断じてない。

④ 自由連合27号で花田映子は「表現者がかり版イデオロギーへと自立し、読者が表現者へと自立する入結社の可能性」を問題にしている。この可能性の中にこそミニコミの本質的意味・マスコミと決定的に棲を分かつ一が存在しているのではないが。

④ ミニコミを製作する過程で、このことを保障せぬが、マスコミに対置する我々の表現の場、武器としてのミニコミはありやうもない。(一色)

社告

自由連合大阪の住所(郵便局名)が変更になりました。
★新名 大阪市旭区・高殿郵便局留
★旧名 自由連合大阪 テマ
④ なぎ、自由連合社へ経路中かめ山駅は今までとおりですが、パンフ由は、向い合わせ等は自由連合大阪の方が、一週間程返事が早くなる、ります。大阪に来られる時は是非連を下さい。

COPYING

東京都新宿区荒木町3丁目402 佐藤方子 (C) 1971 編集 佐藤方子

私達は、いまだに連年の戦争で感じたことは、「政治的争いなるものに解消し切れない」「みずからの立場だった。ある意味でそれは「芸術への未練であり、」フチスルへの憧れ」であるかもしれない。私達はそうした中におかれ、いま持っている自分の表現や表現行為について、「そのままでいいのか」と自問せざるを得ない。いってみればそれがCOPINGの立場である。へんえ書きより、その他、世画報／肖像／持集・僕達自身にとっての「ミニミニ」論、肉いの教訓／伝言板

反入管論

愛知県刈谷市井ヶ谷町42 松島莊 梶井准之 50円

入管体制について、とりわけ在日朝鮮人について語られることは多い。それは我々の思想状況に新たな問題を突きつけてきたにも拘らず、入管戦線は、一般論としての入管・思想的課題としての反入管という抽象論議に終始してきた。そして劉彩品劉道昌等の、米山の一角としての入管体制の被抑圧者に対する、いわばスター支援戦争に終始してきた。これも過言ではない（スターといいたのは劉彩品さんや劉道昌君を云うのではなく、彼等をスター化してそれにどびつくコマンの体質を問題にするのである）。この名古屋には、二万五千人の朝鮮人がいる。が、名古屋における反入管戦線はこれら在日朝鮮人に、何をさして叫びたいといふのであろうか。劉彩品、劉道昌

伝言板

等の問題の底辺にある六〇余万在日朝鮮人の生活状況の重みがたれ去られようとしている時、我々名古屋での二万五千余の人々の中にこそ入管体制の相を視取るべきだと思うのだ。へんえ行政の中の入管体制を切り崩せよう。その他、お、母の話／諸国入管その類似性／

ADORA

島根県松江市北堀町9 古瀬義夫

全共連運動が提起した教育に對して根本問題を我が偉大な教師達は、決して自らの問題として受けとらなかつた。同様の前提がある。敗戦後戦争協力をした教師達は自らの責任をどれだけ自分のものとしたであろうか。口先では何とでも言える。彼らの多くは「仕方がなかった」と自らを慰め、あるいは「新教育こそ本物」と「民主教育」の錦の御旗をふり、新教育理論にとびついた。しかし長くは続かなかった。「根」がなかったと思う。最も進歩的だと自負する教育者こそ最も硬い刀ラを持つていふと言えよう。その他教育問題。銃口は誰に向いているのか。豊和工業へ一株運動の波を。愛知県は「死の商人」に軍需生産を行っている工場が全国で最も多く、大きく分けても二千数社にも及びます。三菱がミサイルを、日本油脂がナールム弾を……。そして豊和工業では手榴弾、迫撃砲、自動銃、ライフルなどが造られていきます。名古屋へ平連は、この豊和工業に一株運動をおこなうとともに、あなたに軍需生産を告発する運動に加わることを要請します。連絡先 名古屋市新栄町二一 高木ビル 名古屋へ平連

RED TACTICS

山口県岩国郵便局 松書箱 49号 ICMC 発行 百円

新しい行動派軍隊としての解決は何か？というのかね。食堂に女を雇いたまえる。つまりところ台所をとりもつてのがいちばんうまいのは誰だということのかね。

台所から表彰口へ一歩は上昇中だ。オラ回「今年度の軍人妻表彰式」がワシントンホテルでひらかれる。これは軍に多くおとめるる食品会社の主催で、井催は国防省だ。「ことしの軍人妻」は全米旅行をこころみにパリパークで開かれる婦人クラス同盟の年大会の特別ゲストになるという。へんえ軍隊よりい、その他、オ一海兵隊員ハケンスタイノそのうらに在る更態／海軍兵士の妻

赤色救援会

我々は旧赤色救援会を継承し、新な救援活動を開始せんとするものであり、全ての人々にその参加を呼びかけるものである。

革命戦争と我々／救援運動と我々 発足に當つての原則／その他

地底のベストセラー

へ天皇裕仁と三島由紀夫の幸福な死

へ天皇裕仁は二度死ぬ

告

へ但シ自連読者にのみ販売

この本を取り次ぎます。姫路市かめ山3丁4

自由連合社 向井孝



雲の切れ目は短かった。台風の近づいていると、雲の流れは速い。断続的に打ち降ろしてくる雨に仕事は変更され、基礎掘りの部分が無くなった。一部土留めをしておくと一日の作業は終わった。昼メシ抜きで木気を含んだ赤土にスコップを入れることは骨が折れたが、明日という日が一日でも近しいことで満足を感じた。

明日がのはんばの満期へ契約切れ。ただこのことが、はんばに果ていう口もあまり面いたことのない。丁さんと仲よくさせた。人間の心理とは思えないものだ。いや、それ以上にはんばの労働が、非人間的なものであるか、ということを感じざるを得ない。

別に待っていることがある訳でもない。それなのに、明日はんばから出れるということが、二人を浮き立たせ、逆に明日の天気を心配させた。

九日間をふりかえってみるなら、はんばにあってのは、そのほとんどが労働であった。その他には疲れた体をいやすための酒、古い漫画、チャンネルを自由にできるテレビ、そして湿っぽい布団ぐらいなものだ。

少しばかり帰りが遅ければ、トコしたのではないかと疑われる。同僚などは、強制収容所に近いところにある不健康なところだ。

あった。

心はずむに帰路についている。身の回りの品を整頓し、他の誰よりも早く布団にもぐり込んだ。

翌朝、雨が少し強いだけで雨は大したことはない。他のアノコは仕事が終わると思いついていたのだから、カッカリしたようす。

「サア、今日はラッタア真面目にやるから、背伸びしながら丁さんがどう話しかけて来た。そして、金とやらとそろそろ帰れるよう金を押すに行こう」と言う。

「別にどうまでせんでも帰れるやろ」という僕に丁さんは「甘い」と言い放った。そんなものかな、と思う僕は足早に食堂に行く。丁さんの後をついて行くだけだった。

「アノマヘン。ワシ等二人今日で満期です。丁さんに、金の方よろしくうお願いしときます」。そう言われた番頭はねぼけ顔でカレンダーを見やり、「そうだったか」といって、そして「仕事もつまっている。そして、三日月のぼつとで丁さんやろか」と言い出す始末。

丁さんの「甘い」と言う意味がはつきり分かった。なれあいで事を済ませようとする経営者と信用するとは自分の首をしめることにつながらず、変な口実を造らせぬためにも、徹底的な確認を、しかも経営者の気分を害さぬ程度に、近づきやういどが勘弁だ、た。

「いや、二人共約束があるから今日帰らせてもらうな困ります」。そして番頭に答えるのを置かず、「ヨロシユウ」と置きせりフをして仕事に向った。

何分はじめてのはんばのことだ。一文も持たず大阪を離れた僕にと、そのことは不安であり、又同時にみじめな思いがした。

低くたれこめた雲の下での労働は陰なものだ。今度はんばは来たら、絶対にトコしてやる、そんなことを考えるが、一日の労働はきわめて長く感じられた。

仕事を終えはんばに帰ると、すぐにメシを食い、大部屋に戻った。カバンに汚れた作業ズボンと歯ブラシをそのまま同席させ、丁さんと一緒に食堂の前で番頭の帰りを待つ。それは絶対に帰るといふ意志表示であった。一時間程して番頭は親方と一緒に車に戻って来た。腹の出たオヤジはケゲンそうな顔で話しかけてくる。

「なんや、もう帰るんか。歩つてるよ、てにもう十日おれや」。僕達が軽くないと、一層波打った顔をして部屋に入っていく。待てと待てと声が掛からない。九時過ぎにいたであろうか、先に丁さんが、そして後で僕が呼ばれた。

金をもらい出てくる丁さんの顔はきわめて波打いたものだった。僕が手にした金は一万二千円。丁さんのそれはわずかに五千円であった。

大の男が十日間働き、夜にビールと酒をどっただけで五千円とは驚いたものだ。その明細も、ノートに走り書きしただけのものであり、不明瞭であった。ねじむき力、二人はもう持ち合わせていなかった。

はんばをこゝなれ主義的にオサラバした僕と丁さんは、金中「ワイスキーを買い込み、ラッパ飲みしながら、大阪へと向った。(へっつく)